

# 音楽科

## 習得・活用・探究型の音楽科授業づくりの研究

—3年生「せんりつのとくちょうを感じよう」の授業を中心に—

向井 さゆり

### 1. はじめに

平成18年12月に約60年ぶりに改正された教育基本法において新たに教育の目標等が規定され、平成19年6月に公布された学校教育法の一部改正により、教育基本法の改正を踏まえて、義務教育の目標が具体的に示されるとともに、第30条第2項において、小・中・高等学校では、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない<sup>1)</sup>と定められた。

また、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、小学校及び中学校の音楽科、高等学校の芸術科（音楽）にかかわる課題を、次のように指摘している<sup>2)</sup>。

表1 中教審答申「幼稚園、小学校、中学校高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改訂について」（抜粋）

- 感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成
- 音楽を表現する技能と鑑賞する能力の育成においては、音や音楽を知覚し、感性を働かせて感じ取ることを重視すること

これら指摘された内容は、決してこれまでに行っていなかったことではないが、音楽科で身につけるべき学力であり、その学力をより明確にしていく必要があるとの指摘であると捉えられる。この課題を克服していくために、日々の授業を系統性・発展性のあるものにしていくことが大きなポイントとなるであろう。そのためには、連続性のある「習得・活用・探究型の授業」が効果的であると考える。

### 2. 研究の構想

#### (1) 習得・活用・探究とは

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会は、確かな学力の育成のために、基礎的・基本的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と、自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究型）は、総合的に育成することが必要であり、そのためには、知識・技能の習得と考える力の育成との関係を明確にする必要があるとし、次のように示している<sup>3)</sup>。

表2 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」（抜粋）

- ①基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させることを基本とする。
- ②理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。
- ③活用する力を基礎として、実際に課題を探究する活動を行うことで、自ら学び自ら考える力を高める。

また、習得・活用・探究の関係については、「一つの方向で進むだけではなく、相互に関連し合っ  
て力を伸ばしていくものと考えられる。（中略）  
探究的な活動を行うことは、子どもの知的好奇心  
を刺激し、学ぶ意欲を高めたり、知識・技能を体  
験的に理解させたりする上で重要なことであり、  
自ら学び考える力を高めるため、積極的に推進す  
る必要がある。」<sup>4)</sup>と示されている。

以上のことから、確かな学力の育成のためには  
習得型の教育と探究型の教育が総合的に行われな  
ければならない。そのために「習得・活用・探究」  
は、互いに関連し合いながら進められるものであ  
り、探究的な活動を行うことは学習意欲を高め、  
自ら学び考える力を高めることにつながるといえ  
る。

## (2) 音楽科における「習得・活用・探求型の授業」 について

音楽科における「習得・活用・探求型の授業」  
を、次のように定義する。

音楽活動を通して基礎的・基本的な知識・技能  
を習得し、それらを表現や鑑賞の活動の中で活用  
していく。そして、活用の場面から新たな知識・  
技能を習得していく。この、習得・活用の連続に  
よって主体的な学習意欲が喚起されるとともに音  
楽に対する価値観が形成されていくことが、探究  
活動である。このような一連の学習サイクルを本  
研究でいう「習得・活用・探究」と捉え、このス  
タイルを取り入れた授業を「習得・活用・探究型  
の授業」と捉える。

「習得・活用・探究型の授業」を進めていく際  
に、今回の学習指導要領改訂で新設された【共通  
事項】を基盤として学習計画を立てていけば、つ  
けたい力がより明確となるであろう。なぜならば、  
【共通事項】は音楽を特徴づけている要素や音楽  
の仕組みをまとめ、音楽の基礎的な知識をより明  
確にした内容となっているからである。また、指  
導計画を立てる際には、表3のような留意点が必要  
であると考えられる。

表3 「習得・活用・探究型の授業」の指導計  
画の留意点

- ①どの学年で何を習得し、それをどの場面で活  
用できるのか、といった系統性・発展性のある  
指導計画を立てる。
- ②同一学年の中で複数の題材を通して系統性  
のある指導計画を立てる。
- ③同一学年の中で一つの題材を通して指導計  
画を立てる。

本研究では③の同一学年の中で一つの題材を通  
す「習得・活用・探究型の授業」を取り上げる。

## (3) 研究の目的と方法

本研究は、旋律の特徴を感じ取り表現の工夫を  
考えて行く過程において「習得・活用・探究型の  
授業」が有効であるかにつて音楽科の授業を通し  
て明らかにしていきたい。その際、子どもの事前・  
事後のワークシートの記述、習得・活用・探求の  
各場面での発言やワークシートへの記述内容をも  
とに検証を行う。

## 3. 実践例

### (1) 題材

「せんりつのとくちょうを感じよう」

### (2) 授業実施学年及び人数

第3学年 40名

### (3) 調査実施時期

平成23年11月

### (4) 題材について

本題材では、音楽を形づくっている要素のうち、  
「旋律」「強弱」「音楽の仕組み」を手がかりに  
して曲の特徴をつかみ、自分の思いや意図をもっ  
て曲想に合う表現の工夫をする。曲の特徴を、音  
楽を形づくっている要素とその働きが生み出すよ  
さや面白さととらえ、曲の特徴を感じ取ることが  
その曲に合った表現の工夫につながると考える。  
本題材では、歌詞と旋律の動き、曲の構成から強  
弱の工夫をしたり、歌い方の工夫につなげたりす  
る活動を通して、曲想に合った表現ができるよう

にする。また、鑑賞を通して学んだことを表現活動に生かすなど、鑑賞と表現活動の関連を図っていくことで、発想を広げたり深めたりして音楽のよさを味わうことができると考える。

#### (5) 児童の実態

本学級の児童は、これまでに2部形式の曲について学習してきた。その時には、自分たちが歌って感じたことや範唱のCD・ピアノ伴奏から、「前半は明るく弾んだ感じ、後半は静かな感じ」のように、曲の前半後半を比較しながら曲の特徴をつかみ、歌唱表現の工夫につなげていった。しかし、音楽を形づくっている要素には触れておらず、旋律の動きや強弱などの要素をもとにした表現の工夫までにはいたっていない。

#### (6) 指導にあたって

第1次を習得場面と位置づける。そこで「メヌエット」を鑑賞し、旋律の動きとリズム、そして、曲想の変化を感じ取らせる。この音楽の要素と仕組みを曲の特徴と捉え、自分自身が曲を聴いて知覚・感受した曲のよさや面白さは、音楽を形づくっている要素や仕組みから感じ取っているということに気付かせる。また、既習曲「赤い屋根の家」を聴いたり歌ったりする活動を通して、自然と声が強くなっていく部分を取り上げ、その部分の旋律の動きから曲の山についての学習をする。第2次を活用場面と位置づけ、歌唱曲「一人の手」の曲想に合った表現の工夫を考えていく。工夫を考える手立てとして、歌詞の内容を把握したり、鑑賞曲での既習事項（音楽を形づくっている要素の働き）に着目して曲想を感じ取ったりするなどして、「一人の手」に合った表現の工夫が考えられるようにしていく。第3次を探究場面と位置づけ、歌唱曲「帰り道」の「アドバイスブックづくり」を行う。この学習では、習得した学習内容・活用できるようになった力を生かして、一人ひとりが「アドバイスブック」を作成していく。

#### (7) 題材の目標

○ 旋律の特徴をとらえて、楽曲全体にわたる曲想とその変化を感じ取って聴いたり表現に生かしたりする学習に進んで取り組むことができる

ようにする。

- 旋律の特徴を感じ取り、曲想を生かした表現の工夫をするなど、自分の意図や考えをもって歌い方の工夫をすることができるようにする。
- 旋律の特徴や曲想の変化にふさわしい表現で歌うことができるようにする。
- 旋律の動きや強弱に気を付けて聴き、そこから感じ取った曲想とその変化を感じ取り、楽曲のよさに気づいて聴くことができるようにする。

#### (8) 学習計画（全8時間）

- 第1次 旋律の音の動きや強弱に気をつけながら  
きこう・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間
- 第2次 曲の山を感じ取って歌おう・・・3時間  
・曲の感じをつかんで歌おう（1時間）  
・曲の感じにあった歌い方の工夫をしよう（2時間）
- 第3次「アドバイスブック」を作ろう・・・3時間

#### (9) 授業の実際

**（習得 i）旋律の動きから旋律の特徴をとらえる**  
＜第1次＞「メヌエット」を鑑賞して、旋律の動きから曲の雰囲気を感じ取り、A—B—Aの楽曲構成に気づいて聴くことができる。

初めてこの曲を聴いた子どもたちは、「なめらかできれいな曲」「ゆっくりした曲」「明るい曲」と楽曲全体の雰囲気を感じ取り言葉で表現することができた。

2回目に鑑賞する時には、「最初から最後まで、なめらかでゆっくりだろうか。」という視点をもって聴いた。鑑賞後に、「途中で感じが変わった。」「はじめの音楽になった。」という子どもの発言から、曲想の変化と曲の構成A—B—Aに気づいて聴くことができたことが分かる。そして、「最初はなめらかだったけど、途中からはずんだ感じになった。」とどのように曲想が変化したのかを、AとBを比較して聴くこともできていた。しかし、なぜそう思ったのか、という理由を発表する子どもは非常に少なかった。そこで、感受したことを知覚し、音楽の特徴をとらえさせるための手立てとして、視覚的に音の動きやリズムの変

化が分かるように図形譜を提示した。

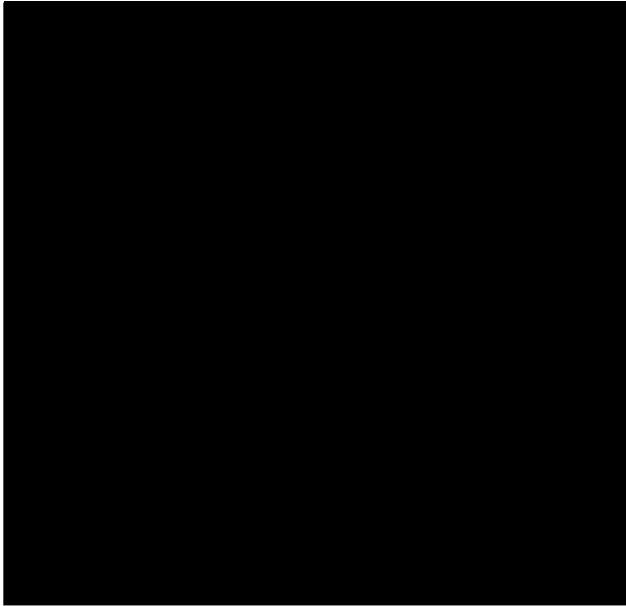


図1 図形譜（教科書の挿絵）<sup>5)</sup>

この図形譜の[A]と[B]を見比べ、[B]の「はずんだ感じ」の根拠を見つけていくことができた。[A]は隣り合った音が多く、リズムも長くのびしていることが見て取れる。従って、[A]の旋律と[B]の旋律の特徴を図形譜を根拠に知識として捉え、感受したことと結び付けていくことで、この曲の特徴を感じ取って聴くことができた。また、音楽の仕組みA-B-A形式についても学習することができた。

（習得 ii）曲想の変化から曲の山を見つける活動を通して旋律の特徴をとらえる。

「赤い屋根の家」は、すでに子どもたちがよく知っている曲であったので、鑑賞後すぐに歌唱を行った。ここでは、前時で習得した曲の仕組みA-B-A形式と曲の山を見つける活動を通して、旋律の特徴を感じ取り歌い方の工夫ができるようにした。

前時の学習を生かし、「メヌエット」同様に「赤い屋根の家」も雰囲気が変わるところがあり、A-B-A形式になっていることに気づくことができた。また、Aの部分は楽譜から①フレーズの冒頭が符点音符のリズムで音の高さも同じである、②その後の旋律も似ている、ということに気づき、

楽譜を根拠に形式について考えることができた。このことは、前時の学び方を生かしているといえる。

本時での新たな学び「曲の山」をどのように感じ取らせていくかであるが、子どもの歌っている表情から「なぜ、表情が変わるのか。」ということの切り口にして考えさせていくこととした。考える手立てとして、楽譜を用いた。音符と音符を線で結んで旋律線を引き、旋律の動きを視覚的にとらえさせることで、旋律の音の動きから曲の山を見つげられるようにした。

表4 曲の山を見つけるための働きかけ

T：A君やB君は、「クレヨンのらくがきは まだかべにあるかな」のところにくると、口がだんだん大きくなって声がよく聴こえてきたけどなぜかな。

P：声が高くなっているからだと思います。

T：それはどういうことですか。

P：クレヨンのから、だんだん声を高くして歌っていくからです。

T：声を高く、というのは、音の高さが高くなっているということですか。

P：そうです。

T：では、A君やB君は音が高くなったからだんだん声が大きくなったということかな。では、楽譜を見て、音が高くなっているか確かめてみましょう。

（楽譜の提示）

（「クレヨンのらくがきは まだかべにあるかな」の部分の旋律線を赤で引く）

P：あっ、山みたいに盛り上がっているね。

T：山に見える？どうして？

P：だって、山の形になっているよ。

T：そうだね。ほかの所はどうかかな？

（他の部分にも旋律線を引く）

P：クレヨンの所が、一番高い山になっています。

P：どうして「クレヨン～かべにあるかな」

のところが声が大きくなるかというところ、この歌の中でここが一番高い山になっているからだと思います。

(活用) 曲の山を見つけて、歌い方の工夫をする。

<第2次>旋律の特徴(曲の山)を感じて歌い方の工夫をする。

前時に習得したこと(曲の山の見つけ方)を次の教材「一人の手」に活用する場面である。

4名のグループで曲の山を見つける学習を行った。第1次で習得した「旋律線から曲の山を見つけることができる」を手がかりに考えていく班が10班中8班に見られた。付箋紙に「なぜそこを曲の山だと思ったのか。」という理由を書き、次の時間に全体で交流できるようにしていった。

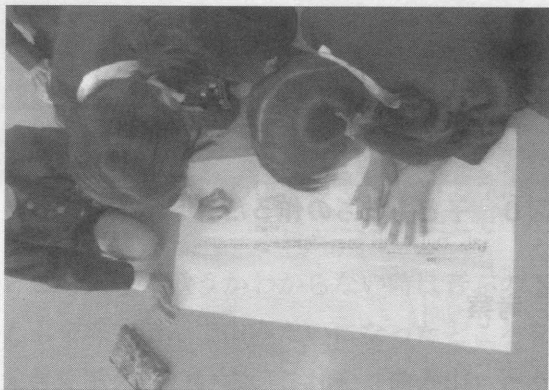


図2 曲の山を見つけその理由を考えている様子

前時に考えた曲の山を班ごとに理由を添えて発表していった。



図3 理由を発表して交流している様子

表5 曲の山とその理由

① 「それでもみんなの手と手をあわせれば」のところが曲の山とした理由

- ・曲の中で一番高い音で、だんだん強くなって行ってだんだん弱くなっていくところだから。
- ・(五線の)第1間よりも音符が上にあるから。
- ・歌う時に声が高くなるから。それと、音符に線を引くと山になっていて、曲の中で一番高い音だから。

② 「なにかできる なにかできる」のところを曲の山とした理由

- ・「ソ・ラ・ソ」となっていて、旋律線をひくと山になるから。
- ・作った人の思いがいっぱいつまっているところだから。

2通りの曲の山がでてきた。どちらも根拠を旋律線から明らかにしており、前時に習得したことを生かすことができています。

次に、曲の山を含めたこの曲全体をどのように歌っていくかについて考えていった。

これまでに習得した内容、すなわち音楽の要素であれば「旋律」や「リズム」、音楽の仕組みであればA-B-A形式を生かした曲の「変化」を感じながら歌い方の工夫ができるように、学習の振り返りを行い、表現の工夫を考えていった。



図4 表現の工夫をグループで考えている様子

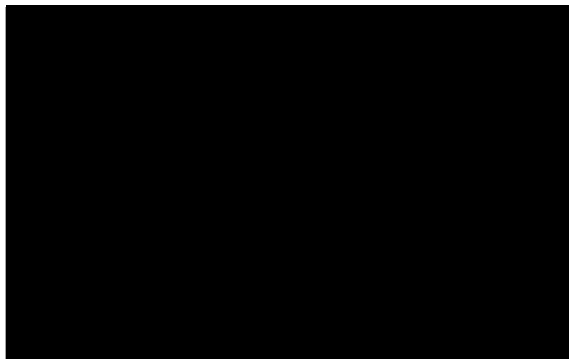


図5 表現の工夫を書き込んだワークシート

ワークシートの記述から、前半の旋律と「曲の山」ととらえているところとの違いを感じ取り、歌い方の工夫を考えているのが分かる。「曲の山」を含めたその前後もどのように歌うと自然な歌い方で、なおかつ盛り上がった歌い方になるかということも考えている。

(探究) 旋律の特徴を感じ取ってアドバイスブックを作る。

<第3次> 旋律の動きや歌詞から歌い方の工夫を考えアドバイスブックを作る。

歌唱曲「帰り道」のアドバイスブック作りを行った。初めてこの曲に出会った子どもが「ねむくなる曲だな。」とつぶやいた。そこで、どうしてそう感じたのかを尋ねたところ、次のような感想が出た。

表6 「帰り道」を聴いた感想

- ・ゆっくりでゆったりしている歌だから。
- ・激しくなく、うるさくない歌だから。
- ・なめらかな歌だから。
- ・低い音から中間にかけての音が多いから。
- ・ことばがたくさん入っているところがないら。(短いリズムがないと指導者が言葉を置き換えた)
- ・題が「帰り道」で学校が終わって帰っている歌でさよならをしてさみしい感じだから。

曲の特徴を旋律の動きやリズムなど音楽の要素や歌詞の内容から感じ取ることができた発言であった。

歌が歌えるようになってから、この曲を来年の3年生が歌う時に「こんな風に歌うとこの曲の感じがでるよ。」というアドバイスができるように一人ひとりがアドバイスブックを作ることにした。「帰り道」については、範唱を聴いた感想を全体で交流しただけで、その他の音楽的な要素や仕組みには触れないようにした。

図6は、一人ひとりが作った「帰り道」のアドバイスブックである。自分で考えた歌い方の工夫を書き込んでいる。

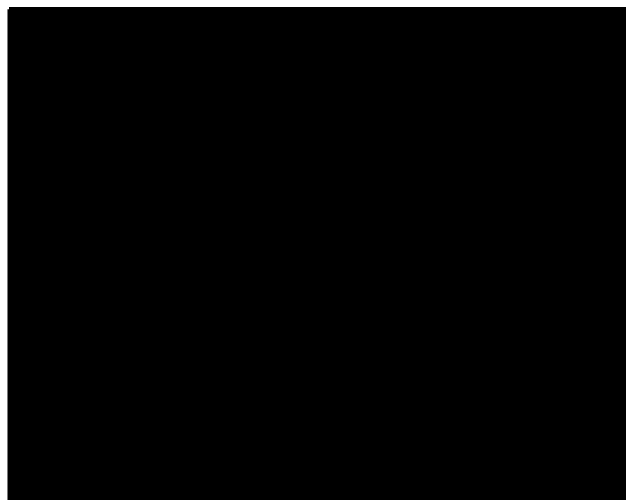


図6 子どもたちの作ったアドバイスブック

#### 4. 考察

教材曲「一人の手」を中心に活用場面を考察していく。

本題材の学習に入る前に一人ひとりが考えた「一人の手」の歌い方の工夫は、表7のとおりであった。一方、第2次の活用場面でグループごとに考えた歌い方の工夫は、表8のとおりであった。

表7 最初に考えた歌い方の工夫(抜粋)

- ・「一人の」のところは、やさしく気持ちをこめて歌う。
- ・「小さな手」は、小さい感じでやさしく小さく歌う。
- ・「みんなの手と手を合わせれば」のところは、

元気に大きな声で歌う。

- ・「なにかできる」と2回くり返されているから、1回目はふつうに歌って、2回目はゆっくり歌う。

以上のように、全員が歌詞を手がかりにして工夫を考えていた。このことから、歌詞による歌い方の工夫をする力はあることがわかる。

「旋律の特徴を感じ取り表現の工夫をする」という活用場面において、子どもたちは表8のような工夫を考えることができた。

表8 活用場面で考えた歌い方の工夫（抜粋）

【歌詞の全体に着目した工夫】

- ・みんなでやればできるという歌だから、最後はうれしそうに歌う。
- ・一人ひとりのことを考えながら歌う。
- ・やさしくふんわりと歌う。

【音楽の要素に着目した工夫】

- ・「みんな」のところは、おくれのないようにはやく歌う。
- ・どこを大きく歌うかわからない時は音ぶの玉と玉を線で結んで山みたいになったところを大きく歌えばいいよ。これを「曲の山」とうよ。
- ・1段目から4段目はさみしいかなしい気持ちで弱く。5・6段目はだんだんクレシェンド、強くする。
- ・7段目はさみしくかなしく歌う。弱く。

表7と表8から、第1・2次で習得した旋律の動きから曲の特徴をとらえ、表現の工夫を考えることができたと考えられる。

題材を終えた子どものふり返りは表9のとおりであった。

表9 子どものふり返り（抜粋）

- ・「一人の手」では、やわらかくきれいな声を出す練習ができてよかったので、次にやわらかくてきれいな声で歌う歌があったらこれを生かしたい。
- ・4つの曲の中で曲の山を勉強して、もり上がって歌うところや、曲の山のだんだん強くやだんだん弱く歌うところを知れてよかった。2年生さんにポイントを教えてあげてそれに気を付けて歌ってもらいたい。
- ・曲の山を知ることができたので、どこを大きく歌うのかが前よりわかるようになった。
- ・急に大きな声で歌うのもダメだけど、逆にぜんぜん声が変わらず歌ってもダメっていうことがわかった。

これらのように、子どもたちのふり返りから、旋律の音の動きや音の高さなどに着目して歌い方の工夫を考えていけるようになったことが分かる。また、学習したことをさらに改善したい、応用していきたいという意欲もうかがえる。

今回の「習得・活用・探究型の授業」で、本題材でつけたかった「旋律の特徴をとらえて表現の工夫をする」という力のうち、旋律の動きと曲の山をとらえ、それを表現の工夫のうちの強弱に関連させる学びが有効であったと考える。

また、冒頭で触れたように音楽科の課題が「音や音楽を知覚し、感性を働かせて感じ取ることを重視すること」と指摘されているように、「～な感じの曲」と感受はしても、知覚面の「なぜそう感じるのか」という根拠をもつことはこれまで不十分であった。そこで本研究では、根拠をもつこと（知覚）を重視して題材に取り組み、子どもたちが、「なぜそう感じたのか」を楽譜から見つけ、表現の工夫につなげようという意欲を高めることができた。また、鑑賞の活動からも、曲を知覚・感受したことを音楽の要素や仕組みと結びつけている姿が増えてきた。

## 5. 今後に向けて

「せんりつのとくちょうを感じよう」という題材を通して「習得・活用・探究型の授業づくり」をすすめていくことは、音楽的知識を習得し、習得した知識を活用することにつながり、学習意欲の喚起や主体的な学びに結びつくことが分かった。

しかし、探究活動での価値観の形成には難しさもあった。今後、つきたい力とめざす子どもの姿をより具体的にイメージし、題材配列や系統性をもった授業計画について研究を進めていかなければならない。

### 〈引用文献〉

- 1) 学校教育法第30条第2項
- 2) 中央教育審議会：「幼稚園、小学校、中学校高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」，2008.
- 3) 中央教育審議会：初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」，2008.
- 4) 前掲書 1).
- 5) 「小学生の音楽3」p.32，2011，教育芸術社.